

不定詞表現と節表現の選択メカニズム

—— voir の発話分析から ——

山 本 香 理

0. はじめに

ある事柄を認知するという事態を **P**，認知対象である事態を **Q** とする。発話者は (1) のように不定詞表現または節表現で **Q** を表して発話を構成することがある。

(1) a. Je vois les dames *se lever* de table.

b. Je vois que les dames *se lèvent* de table. (Willems 1987 : 149)

ところで、**Q** を表すのに不定詞表現と節表現のどちらを用いるかは、動詞によって制約があるようである。節表現をしたがえうるのは **entendre**, **sentir**, **voir** のみで、**écouter**, **regarder** に関しては、節表現をしたがえることはできないと言われている⁽¹⁾。

(2) a. J'écoute les oiseaux *chanter*.

b.*J'écoute que les oiseaux *chantent*.

(3) a. Il regarde Jean *nettoyer* la voiture.

b.*Il regarde que Jean *nettoie* la voiture. (*ibidem* : 147)

以上のことから、不定詞表現と節表現の使い分けについては、個々の動詞の意味特性も考慮に入れる必要があると考えられる。

本稿の目的は、直接目的補語としての不定詞表現と節表現のあいだの選択メカニズムを明らかにすることである⁽²⁾。そのために **voir** の使用実態の観察⁽³⁾と面接調査を行った。以下では、まず意味レベルに着目する。ここでは主に先

行研究の指摘に立脚し、その論旨の妥当性を検証する。次に発話者の **Q** に対する評価を聞き手にどう提示するかといった談話レベルに着目し、選択の要因を考える。

1. 意味レベルにおける選択メカニズム

従来の研究では、不定詞表現と節表現の選択は、「目撃」か「認識」かに応じてなされると指摘されてきた。

- (4) (…) 純然たる「目撃」のときに限って〈N-INF〉の発話を、多少なりとも思考が関わる「認識」のときは〈que N-IND〉の発話を構成すると言えそうである。 (曾我 1998: 125)

ところで、Lemhagen (1979) は「認識」だけでなく「目撃」の際にも節表現の発話を構成すると述べている⁽⁴⁾。

- (5) *En guise de conclusion, nous dirons que la proposition infinitive est le domaine de l'emploi perceptif, à l'exclusion catégorique de l'interprétation cognitive, alors que l'emploi cognitif semble être la lecture préférée de la construction complétive, qui est pourtant parfaitement compatible avec l'interprétation perceptive aussi.*
(Lemhagen 1979: 62)

以下ではこれらの指摘の妥当性を検証しつつ、不十分だと思われる点を補う。

結論を先取りしていうと、目の前で展開している事態 **Q** を視覚で捉え、その **Q** の「目撃」があることを聞き手に提示する場合、不定詞表現で発話を構成する。一方、思考を経て **Q** を捉え、その **Q** の「認識」があることを聞き手に提示する場合は節表現で発話を構成するといえそうである。

目の前で展開している事態 **Q** を視覚で捉えることから、**Q** の **P** に対する時間関係は原則として同時である。

(6) a. Ah, tiens, je le vois *passer* sur le quai de la gare⁽⁵⁾.

b. Je l'ai vu *passer* sur le quai de la gare, hier.

c. Je le verrai *passer* sur le quai de la gare, demain.

このことから、P と Q の生起時点が異なるため、Q を視覚で捉えることができないときは、不定詞表現で発話を構成することができない。この場合、節表現で発話を構成することになる。その際、P の生起時点においての外観・徴候・雰囲気などの間接的な指標に基づいて Q を捉える。(7) に関して、P の生起時点において、Paul が疲れた様子であることから Q を捉えるという場面が考えられる。次の(8)では Antoine がメモを取っている状況、(9)では身支度せずに学校にやってきた生徒の姿から Q を捉えている。こうした P の生起時点の間接的な指標に基づいて Q を捉え、その Q の「認識」があることを聞き手に提示する場合、節表現で発話を構成する。

(7) a.* Je vois Paul *être rentré* tard hier soir.

b. Je vois que Paul *est rentré* tard hier soir.

(8) Solange remarque, posé sur la table, le carnet sur lequel Antoine prend des notes pour son journal.

Solange : Je vois que tu t'es remis à écrire.

(Vicent, C. 1990, *La Discrète*)

(9) (朝寝坊して身支度する暇もなく学校にやってきた生徒に対し教師が)

Je vois que vous n'avez même pas pris le temps de vous coiffer.

以下で示す例は、恒常的性質(10)、心的状態(11)、認識(12)といった視覚で捉えることのできない事態を含んでいる。(13)のQは現実には生起していないことから、視覚で捉えることができない。これらの場合においても、P の生起時点において捉えられる概観・徴候・雰囲気に基づいて Q を捉えることになる。

(10) Je vois que vous êtes un homme qui sait faire face aux engagements qu'il n'a pas pris . . . Ça, c'est bien . . . et, croyez-moi, c'est rare!

(Sautet, C. 1976, *Mado*)

- (11) Je vois qu'il y a deux femmes en vous.

(Truffaut, F. 1980, *Le Dernier Métro*)

- (12) Je vois que vous me comprenez parfaitement . . .

(Vialar, P. 1968, *La Cravache d'Or*)

- (13) En arrivant au bureau, j'ai vu *mon secrétaire ne pas travailler/^{o.k.}
que mon secrétaire ne travaillait pas. (曾我 1998: 126)

次の例において Q <tu-fumer> は目の前で展開している。目の前で展開している Q の「目撃」を伝える (14 a) は、Q を不定詞表現で表すことができる。ところが、(14 b) は不適切であるとされる。一方、(14 c) のように Q を節表現で表せば自然な発話になる。これは、相手がタバコを吸っている現場の「目撃」だけでは <tu-fumer-toujours autant> という事態を捉えることができないからである。というのも “toujours autant” を用いる場合、発話者は以前のある事態との対照を行う。そうした以前の事態との対照を経て初めて <tu-fumer-toujours autant> という事態を捉えることができる。例えば (14 c) は以前に相手が何本もタバコを吸っている現場を目撃し、そしてまた相手がタバコを吸っているのを目撃するという文脈が考えられる。このことから、“toujours autant” といった、発話者が以前の事態との対照を行っていることを示す表現を用いる場合、Q を節表現で表すのは全く自然なことである。(15)においても、(14 c)と同じように、以前の事態との対照を示す“maintenant”を含んでいることから、節表現で発話を構成するのが適切である。

- (14) a. Quand je te vois fumer comme ça, je m'inquiète, c'est normal, non?

b.? Quand je te vois fumer toujours autant, je m'inquiète, c'est normal, non?

c. Quand je vois que tu fumes toujours autant, je m'inquiète, c'est normal, non?

- (15) J'ai vu *Cécile manger maintenant de la viande/^{ok} que Cécile mangeait maintenant de la viande. Elle n'est donc plus végétari-

enne.

(曾我 1998: 126)

ところで、Q の「目撃」が無いことを聞き手に提示する場合、不定詞表現で発話を構成する。

- (16) D'ici, chaque matin, j'entends mon fils me dire “à ce soir” mais je ne le vois pas *partir*/*je ne vois pas qu'il *parte*/*je ne vois pas qu'il *part*.
(曾我 1997: 128)

また、Q の事態の「目撃」の経験の有無を提示する場合にも、同様に不定詞表現で発話を構成する。

- (17) a. Je ne t'avais jamais vu *fumer*!

b.*Je n'avais jamais vu que tu *fumais*!

- (18) J'ai vu *grandir* tellement, des petits garçons . . . Au début, c'est mignon, mais ensuite il y a les marrons, les boules de neige, les chewing-gums au plafond . . .

(Jeunet, J-P. 2001, *Le Fabuleux Destin d'Amélie Poulin*)

- (19) On a vu des enfants étonnamment doués pour le calcul mental *devenir* par la suite des demeurés.

(Gary, R. 1980, *Les cerfs-volants*: 19)

一方、Q の「認識」がない場合に関しては、曾我（1998）が指摘するように、直説法と接続法の使い分けが関連してくる。この問題については、別の機会に論じることにする。

以上から、「目撃」か「認識」かに応じて不定詞表現と節表現が使い分けられるという従来の指摘は妥当なものであると考えられる。しかし、使用実態を観察すると、不定詞表現と節表現がどちらも用いる場合が珍しくないことに気づく。次にそれを見ていこう。

2. 談話レベルにおける選択メカニズム

不定詞表現と節表現が競合する場合、発話者は何らかの談話上の効果をねら

って両形式を使い分けているようである。両形式の使い分けの要因に触れている論考として、曾我（1995）が挙げられる。この論考では **penser** についての両表現の選択メカニズムを論じている。発話者が **Q** の事態についてどのような評価を相手に示すかによって表現形式を選択する、いわゆる談話レベルの要因を扱った研究である。

曾我の主張は次の通りである。（20）のような発話者とは異なる判断をくだしている相手を説得しようとしている場合、つまり、**Q** を事実とする自分の判断を聞き手に共有させようとする場合、節表現で発話を構成する。

（20）（*Rassurez-vous. Il m'est déjà arrivé de faire face à ce genre de situations.*）

a. ? *Je pense en être capable.*

b. *Je pense que j'en suis capable.* (*ibidem* : 2)

これに対して、（21）のような発話者に聞き手を説得する意志のない場合、不定詞表現で発話を構成することがある。

（21）（*Je ne suis pas sûr du tout, mais*）

a. *je pense l'avoir commandé.*

b. *je pense que je l'ai commandé.* (*ibidem* : 2)

このように、**Q** を事実とする自分の判断を聞き手に共有させようとする場合、発話者は **Q** を自分と聞き手に共通の世界に属する事態として提示しようとし、そのとき節表現を選択する。一方、そうした意志は無く、**Q** を自分の内面世界に属する事態として提示する場合、不定詞表現を選択するとしている。

以上の指摘を手がかりに、**voir** について談話レベルにおける不定詞表現と節表現の選択メカニズムを考えてみよう。

発話者は **Q** の現実性の評価を示すために不定詞表現と節表現を使い分けることがある。不定詞表現を用いる場合、**Q** の「目撃」の有無を聞き手に提示することを上で確認した。その場合、発話者は **Q** の「目撃」の有無を聞き手に伝えることに重点を置いている。そして **Q** の現実性は問題にせずに、単に

目に映ったものとして聞き手に伝える。そのことは、Qの「目撃」がない場合でも不定詞表現で発話を構成することからも確認できる。

一方、節表現を用いる場合、Qの「認識」があることを聞き手に提示することを確認した。その場合、Qが現実性の高いものと評価し、Qを現実の時間の流れのなかに位置づける。そして、発話者は節表現を選択することで、Qの現実性が高いという認識を聞き手に共有させようとする。

次の不定詞表現を用いた(22 b)は、Q〈tu-les-prendre〉の「目撃」があることを聞き手に提示している。一方、節表現を用いた(22 a)はQの事態をPとは別に現実の時間の流れのなかに位置づけ、Qの事態について現実性が高いと評価していることを示している。ここでは、発話者はQの「認識」があることを述べることにより、ビー玉を盗っていないと言い張る相手に対して、Qを事実として突きつけている。

(22) Premier élève : Rends-moi mes billes!

Deuxième élève : Mais je les ai pas!

Premier élève : a. Si, j'ai vu que tu les *as pris*!

b. Si, je t'ai vu les *prendre*.⁽⁶⁾

(Clouzot, H-G. 1955, *Les Diabolique*)

次の(23)、(24)は、Qという事実があるにも関わらず、聞き手または発話時点以外における発話者がその事実を捉えていないことを述べている例である。

(23) (仕事中に邪魔をされて)

Ecoute, tu vois bien que je *travaille*!

(24) a. Je n'avais pas vu que tu *fumais*! Excuse-moi! . . . Alors, je t'attends dehors et tu viens nous retrouver dès que tu as fini ta cigarette.

b.? Je ne t'avais pas vu *fumer*! Excuse-moi! . . . Alors, je t'attends dehors et tu viens nous retrouver dès que tu as fini ta cigarette.

ところで、発話者は発話者自身の主観世界で思い描いているQについて言

及することがある。この主観世界に属する事態 *Q* についても不定詞表現または節表現を用いて発話を構成する。

主観世界に属する *Q* の用例を観察すると、不定詞表現で発話を構成する場合、*P* が否定要素を含んでいることが多いことが確認できる。この場合においても、上の「目撃」とほぼ同様のことが言えそうである。つまり、不定詞表現で表す場合、発話者は、*Q* を主観世界で思い描くか否か、つまり *Q* の「想起」の有無を聞き手に提示することに重点を置き、*Q* の現実性については問題にせずに、主観世界で思い描いた事態を聞き手に提示している。

(25) a. Je me vois mal divorcer. C'est quelque chose que j'arrive pas à envisager . . . (Harel, P. 1997, La Femme défendue)

b.?? Je vois mal que je divorce. C'est quelque chose que j'arrive pas à envisager . . .

(26) (いつも寝坊してきた学生が卒業して朝から晩まで働くことについて)

a. Je le vois mal travailler du matin au soir! C'est pas son genre!

b.* Je vois mal qu'il travaille du matin au soir! C'est pas son genre!

(27) Il y aura d'autres jeunes clavecinistes, mais il n'est pas exclu que j'arrête le métier tôt. Je ne sais pas pourquoi, mais je ne me vois pas donner encore des concerts dans vingt ans.

(Le Monde 20/8/2003)

(28) Dans le système politico-médiatique français, impossible de voir TF 1 produire, et encore moins diffuser, une fiction sur les «amis de trente ans» Chirac et Balladur ou sur les coups tordus de Sarkozy dans son ascension vers l'Elysée. (“Une fiction dynamique et sans complaisance sur Tony Blair” : Libération 24/4/2007)

ところで、*Q* の「目撃」の有無を述べる場合、その事態は視覚で捉えられる事態であることを確認した。しかし *Q* の「想起」の有無を述べる場合、*Q* の事態は視覚で捉えられない事態であっても可能である。これは現実世界に属する *Q* を視覚で捉える「目撃」とは異なり、「想起」に関しては、発話者の主

観世界で思い描く *Q* に言及するためそのような制約は課されない。次の (29), (30), (31) に関しては, *Q* の「想起」の解釈のみ成立する。

(29) (?) *Tu ne me vois pas t'aimer?*

≡ *Tu ne peux pas m'imaginer amoureux de toi?*

(30) *Hélène* : *Je me demande si au fond, tu n'es pas jaloux de Maxime*

...

Stéphane : *De Maxime ? C'est un sentiment que je n'ai jamais éprouvé pour lui, et que je ne me vois pas éprouver.*

(Sautet, C. 1992, *Un Coeur en hiver*)

(31) *Il a beau ne pas avoir le profil d'un gentleman, c'est un homme d'affaires brillant. Je ne le vois pas s'abaisser à commettre un crime.*

(Hartzmark, G. 1992, *Le Prédateur*)

一方, *Q* の「認識」がある場合は節表現で発話を構成する。そして, *Q* を現実性の高いものとして, 現実の時間に位置づけている。(32)では, 発話者が *Grozny* が復興している現場を確認していること, (33)では発話者がまさに死に瀕していることを実感していることから, *Q* で言及する事態について現実性が高いと評価していることが読み取れる。

(32) *Et ça fait plaisir de voir comment notre ville reprend forme. Grozny était tellement effrayante! Aujourd'hui, on voit qu'enfin notre vie va s'améliorer.*

(*Libération* 26/4/2007)

(33) *Embrasse-moi tout de suite avant que je sois tout à fait morte! Tu vois bien que je vais mourir!*

(Anouilh, J. 1952, *La Valse des Toreadors*)

3. おわりに

本稿では, まず意味レベルにおける不定詞表現と節表現の選択メカニズムを概観した。従来の指摘にもあるように, 「目撃」か「認識」かによって不定詞

表現と節表現とが使い分けられることを確認した。次に、談話レベルにおいて、Q の現実性についての評価を示す際にも、不定詞表現と節表現の選択が関係していることを明らかにした。不定詞表現で発話を構成する際、発話者は Q の「目撃」、「想起」の有無を聞き手に提示することに重点をおいているため、Q の事態の現実性を問題にしない。一方、節表現で発話を構成する際は、Q の「認識」があることを提示すると同時に、Q について現実性が高いことを聞き手に示す。そして Q の事態を現実性の高いものとして聞き手と共有させようとするのである。

注

- (1) Borillo et al. (1974), Le Goffic (1998), Riegel (1993), Willems (1981), Willems et Defrancq (2000), 朝倉 (2005) を参照のこと。
- (2) したがって、節内の叙法の選択については論じない。
- (3) 西村牧夫先生 (西南学院大学) から提供していただいたデータが非常に有益であった。
- (4) Willems et Defrancq (2000) は節表現を「目撃」の場合に用いるのは稀であるとしながらも、可能であると指摘している。

Les exemples d'une perception directe, simultanée d'un fait ou d'un événement plus rares, mais existent :

Il ne marche pas très longtemps, juste le temps qu'il faut pour que l'on voit <sic> qu'il marche dans les rues.

(*Le Monde*, 19/10/1994 in Willems et Defrancq 2000 : 11)

しかし我々はこの例の **voir** は「目撃」ではなく「認識」と解釈すべきであると考え。これは Q の事態を人々に共有させる意図が “il” にあるために節表現を用いている例であろう。この点に関しては第二章で論じる。

- (5) 出典を示していない発話例は、インフォーマントの協力を得て我々が作成したものの。
- (6) 複数の発話が表示する場合、オリジナルの発話は a である。その他の発話はインフォーマントの協力を得て我々が作成したもの。

参考文献

BORILLO, A. et al. (1974) : *exercices de syntaxe transformationnelle du français*, armand colin.

- DUBOIS, J. (1997) : *Les Verbes français*, Larousse.
- FRANCKEL, J-J. et LEBEAUD, D. (1990) : *Les figes du sujet A propos des verbes perception, sentiment, connaissance*, Ophrys.
- LE GOFFIC, P. (1998) : *Grammaire de la Phrase Française*, Hachette.
- LEMHAGEN, G. (1979) : *La concurrence entre l'infinitif et la subordonnée complétive introduite par que en français contemporain*, Univ. d'Uppsala.
- MARTIN, R. (1983) : *Pour une logique du sens*, Presses Universitaires de France.
- RIEGEL, M. (1993) : *Grammaire méthodique du français*, Presses Universitaires de France.
- RUWET, N. (1984) : “Je veux partir/*Je veux que je parte. A propos de la distinction des complétives à temps fini et des compléments à l'infinitif en français”, *Cahier de grammaire* 7, Univ. de Toulouse-Le Mirail, pp. 76–138.
- WILLEMS, D. (1981) : *Syntaxe, lexique et sémantique Les constructions verbales*, Univ. GENT.
- (1983) : “Regarde voir. Les verbes de perception visuelle et la complémentation verbale”, in ROEGEST, E. et TASMOWSKI, L., *Verbe et phrase dans les langues romanes*, Romanica Gandensia, XX, pp. 147–158.
- WILLEMS, D et DEFRANCQ, B. (2000) : “L'Attribut de l'objet et les verbes de perception”, *Langue Française* 127, pp. 6–20.
- 朝倉季雄 (2005) : 『フランス文法集成』, 白水社.
- 一川周史 (2000) : 『初学者も専門家の動詞オンチではフランス語はわからない——例文比較による徹底解説——』, 駿河台出版社.
- 曾我祐典 (1992) : 『フランス語における状況の表現法——構文・動詞叙法の選択——』, 白水社.
- (1995) : 「判断の表現〈penser+INF/que IND〉」, フランス語学研究, 第 27 号, pp. 1–11.
- (1998) : 「認知動詞の意味と構文」, 『フランス語を探る フランス語学の諸問題 II』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, pp. 123–133.
- (2005) : 「他者の思考内容の現実性についての評価」, 『フランス語を探る フランス語学の諸問題 III』, 東京外国語大学グループ《セメイオン》, 三修社, pp. 132–141.
- ロベルジュ・クロード他 (2002) : 『21 世紀フランス語表現辞典——日本人が間違えやすいフランス語表現 356 項目——』, 駿河台出版社.
- 大学院文学研究科博士課程後期課程——